

伊能図発見の歴史 —『伊能大図総覧』の記事に加筆—

渡辺一郎

1. はじめに

伊能測量の足跡は、測量日記によつてたどることができるが、制作された日本地図の種類、点数などについては、忠敬は何も書き残していないので、全貌は明らかでない。つまり、残されている地図の現物、断片的な史料から推測するほかに方法はないので、厄介である。

明治以降、伊能図が近代地図編集の資料として脚光を浴びてから、帝国学士院の事業として伝記が編纂され、大正年間に大谷亮吉編著により大冊『伊能忠敬』が刊行された。

そのなかで大谷氏は、伊能忠敬が制作した地図の全貌を追いかけ、複製された伊能図も含めてその所在を發表している。本書の記述は伊能図の行方をたどる入り口といってもいいだろう。

その後は、秋岡武次郎、保柳睦美の両氏により補充調査が行なわれたが、完璧とはいいがたいものであった。筆者が伊能図探しを始めた理由の一つは、伊能忠敬の地図作成事業が著名な大事業であるにもかかわらず、その成果品である伊能図の現存状況が明確でないことに由来している。

伊能図の内容評価は伊能研究の出発点と考え、所在調査に努力してきたので、これまでの経過を記して参考に供したいと思う。

2. 伊能図の所在に関する先行報告の概要

伊能図の所在と状況にふれたこれまでの先行報告を列挙すると次のとおりである。

(1) 大谷亮吉『伊能忠敬』大正六年(1917)三月、岩波書店、第六章「地図」(597—615頁)

本書は伊能忠敬研究の決定版といわれ、古典的な名著とされている(以下、大谷著書という)。明治中期に伊能忠敬の事績評価が高くなった時期に、当時の帝国学士院の事業として企画され、長岡半太郎博士の監修により、新進の理学士だった大谷亮吉氏が約10年を費やして執筆し、刊行されたものである。

三井財閥より2,000円の研究費の寄付を受けたので、潤沢な資金により、測量日記をはじめとする各地の史料が筆写収集され、伊能中図八枚他の完全模写も行なわれた。

内容的には、測量器具、測量法についての記述は詳細であるが、成果品である地図への関心は薄かったらしく、完成した地図の紹介は簡略である。多量の収集史料を資料集として添付したり、地図を別冊として刊行したりすることもなかった。

(2) 秋岡武次郎『日本地図作成史』昭和30年(1955)、河出書房

第五編 日本地図作成史上の若干の事項 第一章 伊能忠敬作の日本図（157—163 頁）

(3) 秋岡武次郎「伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するものの若干」昭和 42 年（1967）「地学雑誌」、76 巻 6 号（39—47 頁）

(4) 秋岡武次郎『日本古地図集成』昭和 46 年（1971）、解説第六編「日本地図作成史上の若干の事項」、鹿島出版会（96—101 頁）

自身が古地図収集家でもあった秋岡武次郎博士の伊能図探索の報告で、同じ内容で記述され、時期を経るにつれて詳細となっている。戦後、大名家から放出された伊能図を追いかけ、みずからも購入している。筆者は、この解説第六編の記事を秋岡報告の基準点と捉え、追加修正を試みた。

(5) 保柳睦美編『伊能忠敬の科学的業績』昭和 49 年（1974）、古今書院

伊能図に関する一般的な研究が報告されており、大谷批判を含め、地図から見た忠敬をおおいに強調している。個別の伊能図では学習院大学の伊能図を特殊中図として紹介する。

(6) 小原大衛「伊能家蔵書目録」昭和 3 年（1928）、千葉県図書館協会報、四号

伊能家個人で管理されていた時代に、千葉県図書館司書として伊能家を訪問し、所蔵の地図・史料の目録を制作したもの。

(7) 赤木康司「『伊能図』に関する若干の考察」平成 5 年（1993）、「神戸市立博物館研究紀要」10 号
本報告は、伊能図の所在と内容をテーマとした論文として、1990 年代では一番最初の発表であった。

(8) 日本国際地図学会誌「伊能図特集」平成 8 年（1996）、『地図』34 巻 2 号

フランスから伊能中図の招聘、江戸東京博物館の「伊能忠敬展」開催決定など、伊能忠敬再発見の動きを受けて企画された特集号。現在から見ると不徹底な面があるが、発行時点における伊能図の所在と内容研究の最新版だった。筆者も所在一覧とフランスにあった中図の内容について執筆した。

(9) 東京地学協会編『伊能図に学ぶ』平成 10 年（1998）、古今書院

忠敬生誕 250 年を記念して出版された。

(10) 渡辺一郎『図説 伊能忠敬の地図をよむ』平成 12 年（2000）、河出書房新社

伊能図の紹介のみを目的としたはじめての出版。

(11) 佐々木利和「伊能忠敬『蝦夷地実測図』および『九州沿海図』について」平成 9 年（1997）、「MUSEUM」548 号

東京国立博物館で所蔵していながら、知られていなかった九州第一次測量の大図と蝦夷図の解説。佐々木氏は当時、第二研究室長。

(12) 江戸開府 400 年記念展「伊能忠敬と日本図」図録 平成 15 年（2003）、東京国立博物館

東京国立博物館所蔵「伊能図」の総合解説。

(13) 国立歴史民俗博物館図録「秋岡コレクション・日本の古地図」

秋岡氏旧蔵の伊能図が解説されている。

(14) アメリカ伊能大図展実行委員会編「アメリカにあった伊能大図とフランスの伊能中図」

アメリカ伊能大図展図録 平成 14 年（2004）、（財）日本地図センター

(15) 世田谷伊能家伝存「伊能忠敬関係文書目録」

伊能家に伝えられた史料の主要なものは、昭和 30 年代からほとんど伊能忠敬記念館に寄付されており、目録も整備されている。それでもまだ世田谷伊能家には史料など約 900 点以上が残っていたが、これらも整理のうえ、目録を添付して 2006 年 1 月、伊能忠敬記念館に寄付された。

3. 正本、副本、写本、模写本の定義

伊能図の特徴を紹介し、内容評価におよぶとき、正本、副本、写本など、制作上の由来にふれないわけにはいかない。大谷著書の区分では不適當な面があるので、本稿ではここに述べるような扱いとした。

〔副本〕

大谷著書は「忠敬は地図を浄写するにあたり、突手本と称する定稿より針尖を以て突写し、必要に応じて同一地図を幾通りも製出したるが故に、彼の幕府に上呈したる正本も、又自宅に留めたる副本も、はたまた関係諸侯、及び学友等に与えたるものも地図としての価値は、ほとんど何らの差異を見ざるものなり。

されども茲には、記述の便宜上、かりに幕府に上りたるものを正本と称し、最初より裏打ちを施せる用紙に突写せるものを副本と呼び、裏打ち無き紙に突写せるもの（突写後に裏打ちしたものを含む）を複製図と名付くべし」と述べる。

幕府上呈本を正本とし、伊能家控図を副本と称することは常識的で、誰でも納得しやすい。諸侯などへの献呈図も副本といわれると、一般の人々には納得しにくいかもしれないが、実質的に同じだという点で、大谷説に従うこととしたい。

しかし、裏打ちしてから突写したか、原紙のままで突写したかで分ける分類は納得しがたい。裏打ち紙は傷めば打ち直すのが普通であり、打ち直せば分類が変わってしまう。このような曖昧な基準で整理するのは適當でないを考える。

仏人イヴ・ペイレ氏旧蔵の「伊能中図」は裏打ち紙まで突写した穴が残っており、大谷説にいう完全な副本であるが、東京国立博物館蔵の中図は裏打ちをやり直したらしく、針穴は紙裏まで貫通していないようである。

また、長州藩毛利家伝来の「大図」のように、裏打ち以前に突写が行なわれ、そのまま保管されている例もある。本稿では、裏打ちなしに突写が行なわれた図も含め、突写の針穴が残っていて、完成度が伊能

家控図（現在は伊能忠敬記念館蔵）以上のレベルの図を副本と考えることにする。

〔稿本〕

突写の針穴が鮮明に残りながら、記載事項が著しく簡略な図も現存している。これらは、伊能グループで試作的に作られたか、何らかの理由により途中で作業が中断された図と思われる。廃棄には惜しいので保存され、親戚知人に贈与されたい。

そこで、副本には伊能家控図以上という完成度の基準を設け、これを下回る内容の図を稿本と名付けることにする。これによると京都大学附属図書館所蔵の「伊能大図」は稿本となる。

〔写本〕

江戸時代に何らかの伊能図を手書きで書き写された図を写本という。忠敬存命中から伊能図は貸し出されており、これらは当然書写されたと考えられる。

また、忠敬没後、大名家などで必要があって伊能図を是非入手しようとしたときは、借用して写すしかなかったであろう。幕末にはとくに需要が増えて、写本が多く作られたらしい。成田山仏教図書館蔵の中図、英国海事博物館蔵の小図は幕末に作られた写本と思われる。

〔副本と写本の違い〕

写本と副本はどこが違うのかといえば、伊能グループで制作されたか、他の者が写したかの違いだけである。写本でも、原図が良くて丁寧に写されれば副本と変わらない。

ただ、忠敬が突写を利用したのは、複写の際の誤差防止と複数枚制作の便利さのためだったと思うが、伊能グループはこだわって丁寧に写しを作った。

諸侯に提供された図には伊能家控えの副本より丁寧に制作されたものがある。しかし、ほかの者が写す場合は、そうはいかなかった。大名道具なら丁寧に写されたが、個人的コレクションでは粗雑なものも見られる。写本は副本より、上質なものと粗雑なものとの差が大きいのである。

〔模写本〕

明治以降は地図に対する考えが変わって、絵図ではなく厳密な縮尺による図が要求されるようになり、実測図である伊能図の需要が高まり、陸軍、海軍、内務省など各機関で実用のための写図が行なわれた。

アメリカにあった「伊能大図」もその一つであるが、このように明治以降になって、伊能図の内容を伝えるために手書きで作られた写しを、写本と区別して模写本と呼ぶことにする。

4. 最終上呈図「大日本沿海輿地全図」について

4・1 総説（括弧内は筆者の注）

(1) 大谷著書では調査時点（明治後期）の状況を次のように述べる。

① 伊能家から明治 5 年（1872）に測量司に貸与し、明治 7 年に献納した副本の大図 214 枚、中図 8 枚、小図 3 枚一式が、東京大学図書館に保管されている。

②（大図）写本は陸地測量部、海軍水路部にもあるという（伝聞）。

③中図は大河内子爵家（旧豊橋藩主松平家）にも現存している。

④小図は浜松の内田令太郎所蔵の図がある。本図は足立信頭の後裔のもとに伝えられたものを近年購入したもの。（小図は）維新の前後にあたりて航路上大いに実用に供せられ、諸藩具眼の士競ってこれを謄写したれば、この時代に成れる写本は現今猶多く遺存せり。

⑤英国海軍省に存する（小図）写本は、文久年間に幕府が英国測量艦長に与えたもの。

⑥大槻如電所蔵（小図）は松平伊勢守が命じて謄写したものである。

⑦これら（幕府へ提出の大・中・小図）は、明治 6 年（1873）5 月 5 日、皇城炎上の際に灰燼に帰した（焼失したのは地図のみで、同時に上呈された「大日本沿海実測録」は内閣文庫に現存する）。

(2) 古地図収集家でもあった秋岡教授の論文（『日本古地図集成』解説第六編「日本地図作成史上の若干の事項」〔昭和 46 年〔1971〕〕鹿島出版会。以下、秋岡論文という）では、戦後の状況を次のように述べる。

① 伊能家より献上され、内閣文庫に保存されていた伊能諸地図副本は、東京大学が借用し、付属図書館に保管中の大正 12 年（1923）、関東大震災のため焼失した。

② 江戸時代の豊橋藩主大河内氏蔵の中図は、昭和 23 年（1948）、国立博物館での伊能展に当主大河内正敏氏より出陳され、のちに同館に寄贈された。

③ 内田氏蔵の小図は、当主たる子息六郎氏によって太平洋戦争以前に江田島の海軍兵学校に寄贈された。戦後、昭和 30 年代に南波氏（古地図収集家・元東大教授）に依頼して、兵学校を受け継ぐ海上自衛隊幹部候補生学校、術科学校を調べてもらったが、見つからなかった。

④ 大槻如電、文彦両氏の蔵書は、終戦直前に孫の茂雄氏より東京の静嘉堂文庫に委譲されたが、該小図が含まれていたか、はっきりしない。

⑤ 文久元年（1861）に英軍艦が日本沿岸測量の許可を幕府に請うた際、代わりに与えた小図三舗は、

昭和 26 年（1951）に筆者（秋岡氏）宅に来訪したイギリスの C・R・ボクサー氏によれば、現在でも同海軍省に存するとのことである。

⑥ 秋岡氏は昭和 28 年（1953）、巖松堂から次の大図 3 舗を購入した。

信濃飯山より姥捨付近（筆者の調査——大図第 81 号模写本）

西難波から加古郡坂元（同右——大図第 137 号模写本）

赤穂から岡山（同右——大図第 145 号模写本）

⑦ 南波氏は昭和 41 年（1966）に門司から大宰府の一舗を大屋書房より購入した。本図は九州第一次測量の際のものか、最終本かわからないが、おそらく後者と思われる。

⑧ 中図にはこのほか、旧徳島藩主蜂須賀氏蔵のものがあったが、昭和 26 年（1951）、図書整理の際、処分された。また、旧岡山藩主の子孫である池田宜政氏蔵の中図もこの頃に処分されたが、両家の伊能図が誰の手に渡ったかまではわかりかねる。

⑨ 昭和 15 年（1940）、東京大学に買取を申し込んだ人があり、秋岡氏も実見したが、その後の消息は不明である。

⑩ 伊能家にも四国九州を欠く七舗が存する。

⑪ 秋岡氏も昭和 28 年（1953）、巖松堂から中・四国（中図）の一舗を入手した。

⑫（中図は）成田図書館にも存するという。

⑬ 南波氏は昭和 31 年（1956）、小図 2 舗（蝦夷地、日本西南部）を大屋書房より入手した。

⑭ 江戸幕府末期の老中・安部正弘の後裔正道氏は、小図の蝦夷地の部一舗を所蔵する。これは幕末、日本、ロシア間の北辺領土問題発生の際に必要として、正弘が描かせたものである。

⑮ 模写本として陸地測量部が明治 7 年（1874）頃に伊能家副本より模写した図（中図）がある。これは完写でなくて、必要部分の写しである。「天保国絵図」とともに「二〇万分の一輯成図」の資料となった。

なお、これは北海道などを除く 6 舗のみの写しであったが、建設省地理調査所に引き継がれ、昭和 24 年（1949）に残りの 2 舗を大河内旧蔵図により補写した。

⑯ 同じように水路部でも模写したが、これは関東大震災で焼失した。

⑰ 大谷氏によれば、明治 42 年（1909）に東大保管のものより帝国学士院（日本学士院）が中図を模写

したとのことである。

以上は、筆者が伊能図調査を始めた 1970 年代前半（昭和 40 年代後半）の時点における、最終本伊能図の所在に関する先行研究の状況であった。若干の調査を行なってすぐわかったことは、報告に実見調査の結果が少なく、伝聞を含めた曖昧なものであるということであった。

伊能忠敬の業績は素晴らしいものであるが、その成果品である地図について、本物が焼失したのは仕方がないとしても、現在どれだけ存在しているかもわからないというのは、あまりにも残念に感じた。

それならば徹底して現物を調べてみようと思ったのが、既に述べたように、筆者が伊能図探しに足を踏み入れた原点である。以下に、伊能図の分類に従って、先行報告と対比しながら、その後の発見、新しい確かな事実を報告したい。

4. 2 大 図

（1）国立歴史民俗博物館蔵・大図模写本（秋岡論文関連の大図）

秋岡論文にいう昭和 28 年巖松堂購入の大図 3 枚は、大図第 81 号、137 号、145 号の模写本である。鈴木純子氏が気象庁で発見した内務省地理局制作の模写図（後述）とよく似ており、一連の模写と考えられている。

秋岡博士の「伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するものの若干」（以下、秋岡論文 2 という）で、「寛政 12 年の奥州街道大図」とされている図も、鈴木純子氏の調査で寛政 12 年（1800）の大図ではなく、同じ最終本大図模写本第 69 号、56 号とわかっている。第 69 号は国会図書館の大図模写本と重複しているが、第 56 号は国会図書館では欠図である。

また、同じ論文に登場する「伊能氏大図付属 第七軍管北海道之図」第 34 号および第 35 号は、筆者と鈴木氏らで実見調査したところ、アメリカ議会図書館で筆者が発見した伊能大図模写本の欠本部分と判明した。

秋岡氏が収集した地図類は「秋岡コレクション」として、没後、国立歴史民俗博物館に収められ、同館には 7 枚の伊能大図模写本が収蔵されている。『伊能大図総覧』には、第 34 号、35 号、56 号、137 号、145 号の 5 図を収載した。

（2）山口県文書館蔵・大図副本

川村博忠氏により昭和 63 年（1988）に紹介された（「月刊古地図研究」200 号、記念論集）大図である。実見調査したが、「御両国測量絵図」という表題で伝えられている伊能大図で、針穴は鮮明。裏打ちはないが、描画は丁寧で、文字も達筆である。

来歴の記録が発見されていないのが残念だが、毛利家に伝存したこと、ならびに針穴の存在から、伊能忠敬から毛利侯に献呈されたものと考えられる。

全七枚で、大図第 167 号の一部（広島・桂島付近）、第 169 号および第 173 号から 177 号の地域と、第 178 号の一部（第 177 号に含めて描く）に相当する毛利領を収載する。関門を描く第 177 号の小倉側は白紙である（アメリカ大図の第 178 号では、下関周辺と福岡県を収めている）。

（3）松浦史料博物館蔵・大図副本

大谷著書 219 頁に指摘する諸侯からの複製図要望に応えた図の一つである。『甲子夜話』の著者、松浦静山が忠敬に要望して実現した。筆者は平成 8 年（1996）に実見調査し、「伊能忠敬研究第 9 号」に報告したが、依頼の経緯や謝礼金などを記す副書が残っており、現存する来歴の確かな伊能図として貴重なものである。

文政五年（1822）、忠敬の死後、弟子の保木敬蔵により制作され、高橋景保から謹呈された。仕上げは丁寧で良質な副本である。描画範囲は平戸領部分と長崎周辺に限られ、全 5 枚である。

大図番号でいうと、第 191 号（壱岐）は大図の図郭と合致するが、第 204 号（平戸）は北と南の二枚に分割され、南の部分には第 205 号の一部（平戸領の部分）を含んでいる。

平戸島対岸の第 189 号は第 190 号の平戸領部分を含んでいる。第 206 号（小値賀・五島北）では五島列島中の平戸領を描く。第 202 号は長崎市街周辺のみである。

（4）国立国会図書館蔵・大図模写本

気象庁図書館で江戸府内図を調査中だった国立国会図書館特別資料課長（当時）鈴木純子氏が偶然に発見し、国立国会図書館に寄贈された伊能大図である。

大谷著書は陸地測量部と海軍水路部で伊能図の模写が行なわれたことを伝えるが、本図は内務省地理局で作成された模写図であり、地理局の流れをくむ気象庁に人知れず保存されてきたものである。

江戸府内図調査終了後、ついでに開梱したら本図群であったという。関東地方を中心とする大量 43 枚の大発見で、彩色・文字などが大変優れており、華麗である。これまで公開されていなかったために損傷が少なく、保存状態が非常によい。平成 9 年（1997）10 月 26 日に新聞発表され、大きな話題となった。『伊能大図総覧』にすべて収載している。

（5）アメリカ議会図書館蔵・大図模写本

平成 13 年（2001）3 月 31 日、たまたまワシントン旅行中の筆者夫婦が、アメリカ議会図書館の地図室

で大量 207 枚の大図模写本を発見した。帰国後、当時は国土地理院参事官で日本国際地図学会常任委員長をしておられた星埜由尚氏と相談し、調査団を作って 6 月 18 日から 22 日まで全図を開いて調査を行ない、内容を確認した。

参加者は日本国際地図学会・鈴木純子、(財) 日本地図センター・永井信夫の各氏と、筆者および現地で御協力いただいた留学生の神田涼氏であった。

内容は、明治初年に旧陸軍の測量機関が制作した模写図で、二系統の地図の集合であった。第〇軍管伊能氏大図という標題の簡易着色の図と、号数と代表地名を標題として朱色の測線と居城のみを彩色した無着色に近い図の、二系統の地図の組み合わせからなっている。

北海道、紀伊半島の一部、大阪・尼崎、明石、浜名湖付近など、39 枚が簡易着色で、残り 168 枚は無着色に近い図である。目的が近代地図制作の参考用だったので、海岸線、水路、測線（街道）など地図に必要な要素は正確に模写したが、山景、樹木、田畑などの絵画的な部分は思い切って省略され、山の形のみが墨線で残されている。

例外は居城の外観である。大変丁寧に描かれ、華麗な伊能図を目前にして、実用的な要図の制作を命じられた制作者の想いを伝えている。

偶然発見したアメリカ伊能大図であるが、アメリカ議会図書館の「地理・地図部」部長エペール博士の話では、同図書館に受け入れた記録がなく、来歴や受け入れた日はわからないという。

日本の記録では、明治初期の伊能図模写の動きから、陸軍の測量機関で大図の模写が行なわれたことは確実である。一部の図には制作を担当した軍人の名前が書かれている。震災以前の状況として大谷著書も「(大図) 写本は陸地測量部、海軍水路部にもあるという (伝聞)」と伝えている。

また、戦前の参謀本部陸地測量部発行の「研究蒐録 地図」(昭和 18 年 7 月) のなかに、総務課編の「伊能忠敬先生測量叢話」なる伊能忠敬顕彰記事があり、そこに陸地測量部が大図 214 枚、中図 6 枚(北海道を除く)、江戸府内図南北 2 枚ほかを所蔵する旨が記載されている。

記事としては執筆者名がなく、伊能忠敬の人物関連の部分に誤りが見られ、信憑性に疑問があるが、陸地測量部の所蔵品については信じてよいのではないかと思う。実際に中図 6 枚と江戸府内図 2 枚は、陸地測量部の流れをくむ国土地理院に現在保存されているが、大図は存在しない。

陸地測量部大図(以下、陸測大図と称する)が戦前に存在したとすると、戦後になぜ紛失したのであろうか。陸測大図とアメリカ大図は同じものなのか。なぜ中図や江戸府内図があるのに、大図だけ消失しているのか。こうした疑問は尽きない。

終戦時、陸軍で多量の書類が焼却・廃棄されたが、陸軍文庫にあつて廃棄を免れた伊能図として、国会

図書館蔵の沿海地図小図副本（堀田摂津守旧蔵）や学習院大学蔵の伊能図 8 枚の例があるので、廃棄された可能性は捨て切れない。

廃棄あるいは払い下げられれば、市中購入ということがありうるが、廃棄でないとすれば、終戦時に米国による接収という線が浮上する。いずれにせよ、目下、決め手になる証拠は見つかっていない。

そのなかで一つ参考になる事実は、国立歴史民俗博物館で、アメリカ大図の欠本部分の第 34 号、35 号が発見されていることである。本図は、秋岡博士が市中購入したものである。購入の際、「こういう地図を入手した」と清水靖夫氏（国士舘大学講師）に話をしたと同氏は証言している。

歴博の第 34 号、35 号は第七軍管図であるから、陸測大図と別系統の軍管図が市中に流れたと推測することもできる。アメリカにあった軍管図が市中で買い集められたと考えると、ほかの図も同様かもしれないと憶測できる。

そして、終戦の混乱期に陸測大図がもち出され売却されて、それをアメリカの具眼の方が買い集めたが、全部は集まらなかったという仮説が成り立つ。

接収なら全部もって行くはずなので、欠本があるのはおかしいし、二種類の寄せ集めというのもおかしい。また、接収なのに在庫記録がないのも不審である。

密かに市中流出と仮定すると、中図、江戸府内図は立派に軸装されていて貴重品扱いだったが、大図は折りたたんで積んであっただけで、反古に近い状態だったことも考えに入れてよいだろう。筆者は目下のところ、市中購入説が有力と考えている。

（6）海上保安庁海洋情報部蔵・伊能大図縮小模写本

旧海軍水路部では、明治初期に海図整備のため、内務省地理局が伊能家から原図を借用して模写した大・中図を更に借用して、明治 11 年（1878）1 月までに模写しているが、この図は関東大震災で焼失してしまった。水路部の模写図焼失については、大谷著書、秋岡論文ともにふれている。

ところが、秋岡論文 2 では、清水靖夫氏に依頼して調査したところ、焼失した図を、同じ水路部の第二課が業務の必要から模写したものが海上保安庁水路部（当時）に現存するとして、伊能図目録の序文を紹介している。

この記事により、筆者も昭和 40 年代に一部を実見調査し、実在を確認しているが、膨大な地図群であり、個人では手がつけられない状態であった。

本伊能図群の存在は、このように 10 年以上前からわかっていたが、模写図のまた模写であり、しかも縮小模写されていて、縮小率や模写条件は不統一であったので、無条件に模写本とするには抵抗が大きか

った。

しかし、国会伊能大図、アメリカ伊能大図、歴博伊能大図の発見で、大部分は模写本であるが、ほとんどの大図が見つかり、未発見はあと四枚となったとき、海上保安庁の大図を探索してみようということになり、平成 16 年（2004）6 月、鈴木純子氏と海洋情報部を訪問し調査したところ、欠図の 4 枚を発見することができた。

大図第 12 号（稚内） ケバ式であったが、拡大すると周辺とよく接合した。

大図第 133 号（京都） ケバ式縮小図であるが、測線、宿駅印の○、天測地☆が朱で描かれており、伊能図の面影を伝えている。

大図第 157 号（福山・尾道）

大図第 164 号（呉〔備後、安芸、伊予〕）

いずれも縮小図であったが、原寸大に拡大して周辺図と接合することができた。

海洋情報部大図の再調査

『伊能大図総覧』の完成により、大図の全貌が明らかとなったので、海洋情報部の大図を精細に調査しようということになり、2007 年 1 月 22 日（月）から 24 日（水）の 3 日間、同部所蔵の「伊能大図謄写図」（海洋情報部ではこの名称で整理されてきた）全 147 枚について調査をおこなった。

調査者は筆者および伊能忠敬研究会の星埜由尚、鈴木純子、齊藤仁、伊能洋、坂本巍、秋畑武晃の各氏と、井上均見（海洋情報部）、西田浩志（同）、今井健三（日本水路協会）氏であった。

『伊能大図総覧』所収図と海洋情報部所蔵図を一点ごとに照合し、各図について図郭、内容などの改変状況その他をチェックし、次のような諸点が明らかとなった。

- ① 147 枚の図の中に、部分・略写などを含めると、大図 150 図余りが何らかの形で関係している。
- ② 伊能大図の描画形式どおりに写した「伊能図式」（鳥瞰図式）の彩色図と、山地をケバで表現するなど「平面図式」に改描した図の、二種の形式に分けられる。

このうち、伊能図式の図はさらに原寸の模写図と縮小または縮小集成図の 2 種に分けられる。平面図式の図は全て縮小図である。

- ③ 種類別の枚数は原寸模写図 6 枚（2 枚は重複、1 枚は集成図）。伊能図式の縮小図は単独図 44 枚（5 枚は山・島の遠景のみ）に、集成図、部分図を合わせて 77 枚。平面図式は 69 枚で、集成図 2 枚、部分図 1 枚を除く 66 枚は単独図である。

平面図式の図は大多数が山地をケバ式で表現するものだが、なかに二枚（単独図 1 枚・集成図一枚）

だけ、ケバ式ではなく等高線的な水平曲線(フォームライン)式の図がある。

以上のほか、形式の特定できない略写図が 1 枚で、合計 147 枚である。伊能図式とした図のなかにも簡略図がある。

- ④ 原寸模写図中の 3 枚は模写図としては最高のレベルに属する優品である。海洋情報部番号 140、139、124 (伊能大図号数で 181、183 および 185 号 別府・大分、佐伯、宮崎) にあたる。縮小図のなかにも精緻な図が多数あるが、簡略な図も混在する。
- ⑤ 単独図だけでなく集成図中にも一図の図郭がそっくり含まれているケースが多い。大図一図の図郭を拾いあげ、簡略化の著しい図を除くと、縮小模写図として姿をとどめている伊能図式の大図の数は 70 図前後である。

変形バージョンである平面図式の図は、伊能図式の図と比べると、書写のレベルが比較的一定しており、伊能図の骨組みをなす海岸線、街道、目当てとした山頂の位置、地名などを忠実に再現している。ケバや畑地の記号等が美しい。近代図の衣をまとった伊能図としてユニークな地図群である。

- ⑥ 縮小図の縮小率は、これまで原図 (36,000 分 1) の 2 分の 1 から 4 分の 1 とされてきた。厳密な縮率の算出は不可能であるが、総覧との比較で求めたところでは、原図の 5 分の 2 前後のものが大多数である。

多数図を集成した広域図には 6 分の 1、つまり中図の縮尺まで縮小した図もある。海洋情報部番号 77 (伊能図号数 174、176、177、石長周海岸) および、82 (148、149、159 など、土佐南岸) の 2 点である。

(7) 京都大学附属図書館蔵・大図稿本

京都大学附属図書館は、対馬、壱岐、平戸、五島上下、屋久島、種子島の大図稿本 7 図を所蔵する。増村宏氏の報告にあったので実見調査したが、折本袋入りで、袋に入手の経緯が書かれている。忠敬から伊能家の親戚である土浦の内田家に謹呈されたもので、戦後、京都大学が購入した。

全図が彩色され、針穴もある。対馬、壱岐、平戸、五島、種子島では、地名を墨で小さく書いたあと、かたわらに朱文字で大きく同じ文字を記す。地名を二度書くのはおかしいから、試作して文字の大きさ、周辺とのバランスを見たのであろう。校合用の朱のチェック印がある図もある (壱岐、五島上下)。

風景的彩色は丁寧で、海岸の崖の描写などリアルであるが、接合記号が完備していないこと、地名の記載が試験的であることなどから、本図は完成品ではないと考えられる。本図は大谷著書も秋岡博士の報告もふれていない。

京都大学附属図書館は、このほか九州第1次測量の中図稿本、四国と淡路の中図稿本も所蔵する。

4.3 中 図

(1) 東京国立博物館蔵・中図副本

大谷著書と秋岡論文の共通の認識として、大河内家に中図8枚一式が伝えられたことを述べ、秋岡論文では昭和23年(1948)の東京国立博物館における伊能忠敬展を契機に同博物館に寄贈されたと記している。また、東大にあった中図を模写した伊能図一式が日本学士院に保存されていると述べている。

大河内家の中図は現在、東京国立博物館に重要文化財として書庫深く架蔵されており、簡単に閲覧することはできないのは残念である。筆者が伊能図探訪を始めた当初は、特別閲覧願いを提出し料金を払えば、研究者として自由に手に触ることができた。

秋岡論文は中図について、真偽とりまぜてさまざまな指摘をしているが、これらを含めて現存する中図について筆者の見解を述べてみたい。

(2) 日本学士院蔵・中図模写本

日本学士院には目録によると、関東大震災で焼失する前に東京大学の図書館にあった中図を写したという模写本が伝えられている。関東と中部は軸装されており、筆者は実見している。大谷著書執筆の際に資料として作成されたようで、美麗、精緻なもので、伊能図の面影を十分伝えている。

完成度の高い中図模写本といえるだろう。残念ながら、ほかの6枚は軸装されていないという理由で調査できなかった。見ていない図を目録だけで現存とするわけにはいかないが、一応現存と記しておく。

(3) 成田山仏教図書館蔵・中図写本

「成田図書館にもありという」と、秋岡論文が伝聞として紹介する中図である。成田山新勝寺経営の成田図書館は、その後に成田市立図書館開館にともない、成田山仏教図書館と改称して所蔵品を引き継いでおり、伊能中図を所蔵している。

調査は、国立国会図書館の沿海地図小図、東博中図、学士院中図を実見調査したあとで行なったので、すぐに、完成度が高く、東博中図に匹敵する優品であると判断できた。依頼により同博物館の館報に寄稿した。成田中図紹介の初出である。

その後、平成10年(1998)の江戸東京博物館「伊能忠敬展」に東京国立博物館中図とともに出品され、広く知られるようになったが、本図について、これまでにわかったことは以下のとおりである。

来歴は図書館で調べてもらったが、明確ではない。入庫記録はないが、関係者の話では、昭和15年(1940)頃、同館所蔵の「(重文) 住吉物語」、「佐倉城下之図」とほぼ同時期に、三点を成田町の古書肆「宇宙堂」から新勝寺で購入したとのことである。

新勝寺、図書館とも、当時の関係者はみな没しており、記録もないので、これ以上探索の方法はないとのこと。いっぽう、図書館の桜井総務課長の推測では、旧佐倉藩主堀田家から出たものではないかという。

桜井説にもとづき、筆者なりの理由付けをすると次のとおりである。本図は東博中図に匹敵する膨大、精緻なもので、大名道具の可能性が高い。ほぼ同時期に購入された「佐倉城下之図」などは、佐倉藩所蔵であって当然と思われる。

ほかの大名家収蔵伊能図の流出経過を見ると、戦後の財産整理の際に売却された例が多いが、堀田家は戦前に財産整理が行なわれている。また、堀田家の幕末の当主であった堀田正睦は外国掛と老中首座を務め、藩主としては蘭学を奨励し、兵制改革にも熱心であった。伊能図の複製を作らせた可能性は高いと思われる。

新勝寺当局の立場で考えると、古書店からもち込まれても伊能図の評価ができるはずはないから、おそらく佐倉藩堀田家の品であることだけを信じて求めたものであろう。財産整理は聞こえのよい話ではないから、出所については内分にとということであったとすれば、記録は何も残らなくても不思議はない。

本図には針穴はないが、大名家の旧蔵にふさわしい完成度の高い写本である。

(4) 東京大学総合研究博物館蔵・中図副本および写本

秋岡論文では東京大学に中図の売り込みがあり、実見したと記している。そして現在、東大は総合研究博物館に関東を除く中図七枚を所蔵する。現況を述べると、北海道の2枚とその他の5枚は別系統の図で、二組が合成された中図群である。

北海道の2枚には針穴がなく、ほかの5枚には針穴が残っている。いずれも襖仕立てになっており、地図としては異様な保存方法である。地理学教室の故米倉教授に聞いたところでは、理学部の事務室に皺だらけの、ひどい状態で置かれてあったのを発見し、整備したものという。

東北、中部、中四国、九州北、九州南の5枚の現物は完成度が高く、天測地点の☆印も描かれている副本である。一方、2枚の北海道図は他の5枚と較べると描画が粗い写本である。

これら中図が秋岡論文の「昭和15年(1940)に東大に売り込みがあった」という図に相当するかどうかであるが、東大に受け入れ記録が残っていないので違うだろう。時期的には成田山新勝寺に納まった成田中図が売りに出されたタイミングと符合する。

筆者はむしろ、5枚の部分については、関東大震災で焼失したとされる東大図書館保管の伊能家提出の中図副本が、何らかの理由で焼け残ったのではないかと考えている。

現物は、伊能家の控えとして残された副本であっても少しもおかしくない完成品である。だが同様の品は、諸侯に献上された図のなかにもあるので、内容の面から伊能家献上の副本の一部と断定することはできない。あくまで来歴を証する資料の出現に期待している。

関東の部の欠本も不思議な話である。おそらく何者かの手で、ほかの場所にもち出され、返却が忘れられたものであろう。北海道の2枚はさらに不可思議で、副本がなく、わざわざ写本2枚に置き換えている。

(4) イヴ・ペイレ（仏）旧蔵・中図副本（現・日本写真印刷株式会社蔵）

平成3年（1991）3月「フランスに伊能図があった」という日本経済新聞の報道をみて、大谷著書と秋岡論文ではまったく、ふれられていない中図なので、平成7年（1995）3月に、筆者夫婦でパリ郊外のペイレ宅を訪問し、調査を行なった。

事前に元国土地理院長・金窪敏知氏および清水靖夫氏の情報で、中図らしいことはわかっていたが、内容や状態はまったく不明であった。実物を調べた結果は、針突法による複製で、完成度がきわめて高く、天測地の☆印も記入されている優秀な副本であった。

撮影現場で日本展示を打診し、平成7年11月17日から3日間、佐原市の協力をいただいて、同市で一時里帰り展を開催。現在の伊能ブームのキッカケとなった。

平成16年（2004）のアメリカ大図の博物館展（神戸市立博物館、徳川美術館、仙台市立博物館、熱海MOA美術館を巡回）では、あらためて、フランス中図を招聘し展示した。縁あって京都の日本写真印刷株式会社に購入していただき、日本に永久里帰りをすることができた。

内容的には東博中図に比肩する優品であるが、来歴については残念ながら全くわからない。筆者の推測では、幕末に徳川幕府が雇用していたフランスの軍事顧問団のシャノワン大尉等がもち帰ったのではないかと考えている。

シャノワン大尉に率いられた彼らの一部は、箱館戦争まで従軍しており、このときの幕府軍主将・榎本武揚は、伊能測量隊員・箱田良助（のちに榎本家の御家人株を買って幕臣・榎本円兵衛となる）の次男だった。幕府艦隊を率いて脱走した際に幕府蔵の伊能図をもち出した公算は大きい。敗戦後、渡すべき礼物がなく、仕方なく地図を渡したという推理であるが、考えすぎであろうか。

(6) 国土地理院蔵・中図模写本および九州南部中図副本

大谷著書と秋岡論文がともに指摘している陸地測量部に伝えられた中図模写本で、北海道の2枚を欠いた6枚である。明治7年（1874）以降に謄写したと関東の部に張り紙がある。

大谷著書では伝聞を記すのみであるが、秋岡博士は戦後、東博中図の「北海道の部」を模写して8枚になっていると述べる。当時そういう企画があったかもしれないが、事実として、北海道図は含まれていない。

また、本図の模写にあたっては、伊能図をそのまま写すのではなく、地図記号、描写法、経緯線などに工夫が加えられている。湊の船印を錨印に、天測地の☆印を◎に、経緯線は烏口で細く、絵画面を避けることなく引かれている、などの違いがある。

模写本のほかに、1枚であるが、九州南部の副本を所蔵する。数年前に発見されたもので、板上に貼り付けられており、状態がよくなかったが、針穴が認められ、記入内容もそろっており、副本といえる中図である。

(7) 北海道大学蔵・中図副本

北海道大学の北方資料室に、北海道部分の中図二枚が所蔵されている。来歴不詳であるが、調査したところ、針穴があって副本といえる内容であった。

(8) 天理大学附属天理図書館蔵・中図模写本

日本国際地図学会誌（『地図』伊能図特集号、1996年）掲載の、報告「天理図書館蔵『大日本沿海輿地全図（中図）』神崎順一」によると、天理図書館に佐渡と対馬・五島が別葉となって、全10枚構成の伊能中図写しが所蔵されているという。

反町弘文荘から昭和26年（1951）頃に購入したものという。標題は国名をすべて列挙する書き方で、蝦夷地は北海道とされているから、標題が書かれたのは蝦夷地が北海道と改名された明治22年（1868）以降と考えられる。

針穴はなく、経緯線と方位線、国界を示す二本線以外の地図記号は書かれていないという。筆者は一部しか実見していないので、内容についての意見は差し控える。

来歴はわかっていないが、おそらくは明治期の模写本であろうという（赤木康司『伊能図』に関する若干の考察」神戸市立博物館紀要10（1993））。

(10) 国立歴史民俗博物館蔵・中図写本

秋岡論文で「昭和28年、巖松堂から中・四国の一舗を入手した」と述べる中図で、同館の秋岡コレクションに現存する。地図記号がほとんどなく、測線、地名、風景を中心とした中・四国の中図である。筆者は実見したが、仕上げが簡略な写本という印象である。

(11) その他

秋岡論文にいう「伊能家にも四国九州を欠く七舗が存する」との記述は、事実誤認である。伊能家の史料が寄贈された香取市の伊能忠敬記念館には該当する図は所蔵されていないし、平成 18 年（2006）3 月に伊能家に残されていた史料すべてが詳細な目録とともに伊能忠敬記念館に寄贈されたが、このなかにも含まれていない。

4. 4 小 図

(1) 神戸市立博物館蔵・小図写本

秋岡論文において「南波氏が昭和 31 年、小図 2 舗（蝦夷地、日本西南部）を大屋書房より入手された」という小図である。南波コレクションとして神戸市立博物館に収蔵された。針穴はないが、精細な写本である。

おそらく大名家に所蔵されたものが戦後流出したのであろう。本州東部を欠いているのは残念だが、戦後の流出なので放出元が保留したか、あるいは何らかの理由で分離収蔵されていた可能性がある。発見されることを祈りたい。

(2) 英国海事博物館（National Maritime Museum）蔵・小図写本

大谷著書で「英国海軍省に存する（小図）写本は、文久年間幕府が英国測量艦長に与えしもの」といい、秋岡論文で「文久元年（1861）英軍艦が日本沿岸測量の許可を幕府に請うた際、代わりに与えた小図三舗は、昭和 26 年（1951）筆者宅に来訪したイギリスの C・R・ボクサー氏によれば、現在でも同海軍省に存するとのことである」と述べる小図 3 枚揃である。

保柳博士も『伊能忠敬の科学的業績』のなかで紹介しているが、いずれも肝心の写真が掲載されていない。保柳博士は、大谷著書が伊能図を収載しないことを厳しく批判しているが、英国小図を紹介する自らの記事では小図を掲載していない。

それほど海外の地図写真の入手は大変なのである。筆者は状態を知りたかったので、欧州旅行の途中、通訳を雇い訪問して閲覧を求めたが、最初はあっさり断わられてしまった。しかし担当学芸員の名前がわかったので、手紙の交換で撮影を依頼し、平成 9 年（1997）にカラーポジを入手し、先行報告のとおり現存することを確認した。

一方、その前年の平成 8 年には、江戸東京博物館で 2 年後の「伊能忠敬展」開催が決定していたので、翌平成 9 年に「江戸東京博物館伊能忠敬展」の企画委員として、あらためて現物借用依頼の第一報を送った。

共催者の朝日新聞社の協力により折衝はまとまって、英国測量艦に渡されてから 137 年ぶりに、英国

小図の日本への一時里帰り展示をすることができた。

本図は、文久元年（1861）に英測量艦アクテオン号（艦長ウォード中佐）に渡され、内容の正確さを認識した英国海軍水路部は2年後の文久3年（1863）、これにより日本沿岸を示す英国海図2347号を改訂した、という歴史的な伊能図である。

内容は完成度の高い写本であるが、天測地を示す☆印と針穴はない。幕府軍艦方所蔵図だったことは、勝海舟の『開国起源』収載の外国奉行下役・荒木濟三郎日記に明らかであるから、幕府でも写本を用いていたことがわかる。

（3）東京都立中央図書館蔵・小図写本

英国から小図里帰りの記事が新聞を賑わせていたとき、北方図の研究者・高木崇世芝氏から「小図はほかに日本にある」との連絡を受けた。驚いて早速、東京都立中央図書館を訪問調査すると、日本にはないとされていた本州東部と日本西南部の小図写本が見つかった。

入庫受け入れ日付は大正6年（1917）であった。来歴については日本西南部の地図裏に記録があり、「大槻先生（如電）のお話では、安部勢州公執政たりしとき、幕府天文方に命じて複写させたもの」と記されている。

針穴はなく写本であるが、天文方の制作ということもあって、達筆にして朱の測線の引き方が丁寧で、天測地の☆印もあり、完成度が高い図である。伊能小図の描画方法は2種類あったと推測できるが、本図は神戸市立博物館の所蔵図と同じ系統の図である。

結論から記せば、この小図が、大谷著書で「大槻如電の蔵するもの（小図）は松平伊勢守が命じて謄写せるもの」といわれ、秋岡論文では「大槻如電、文彦両氏蔵書は終戦直前に孫茂雄氏より東京の静嘉堂文庫に委譲されたが、該小図が含まれていたかどうかは、はっきりしない」と記している小図である。

筆者は、大谷・秋岡両氏の記述に基づいて静嘉堂文庫を探索したが、見つからなかった。（注一同文庫では別に、これまで公表されていない針穴付きの「カナ書き伊能特別小図」を発見した）。

本図には大槻蔵書という蔵書印があり、印譜に照らして大槻如電の旧蔵品であることは確実とのことである（東京都立中央図書館）。添え書きの阿部勢州は、安部伊勢守で幕末の老中阿部正弘を指す。阿部家の現在の当主である正道氏に問い合わせたが、伊勢守は間違いなが阿部家には松平姓はないという。

大谷著書の松平伊勢守は間違いで、阿部伊勢守が正しい。また、収蔵先については、秋岡論文にいうように静嘉堂に収蔵されたことがあるかもしれないが、何らかの理由で当時の日比谷図書館に入庫し、東京都立中央図書館収蔵となっている。

(4) 九州国立博物館保管・小図副本

以上により、伊能小図 3 枚が国内でもそろふことになったが、ここでさらに大きな発見があった。東京国立博物館で九州国立博物館に移管する資料の整理中に、昌平坂学問所の蔵書印のある伊能小図 3 枚が見つかったのである。

正確にいうと、同館に従来から収蔵されていたが、「日本国図」という標題がついており、この名称で管理されていたため、伊能小図であることに気がつかなかったのである。伊能小図と判断できる人がこれまで実見しなかったため、明治以来退蔵されてきたということであろう。

たまたま、伊能図ではないかと感じる方の目に触れて、筆者を含めて関係者により伊能小図 3 枚ぞろいと確認され公表された。平成 14 年（2002）8 月 8 日、記者発表を行ない、筆者と博物館の佐々木利和室長（当時）が説明したが、大ニュースとなって全中央紙と主要県紙、NHK から報道された。

内容としては文句のない副本で、天測地点の表示がないほかは、完成度の高い図である。小図には都立中央図書館所蔵図、神戸市立博物館所蔵図のように国名が朱の短冊内に描かれているものと、本図や英国小図のように国名は朱枠だけの図の 2 種類があったようである。

本図は上呈図ではないが、幕府機関に提出されたものであり、限りなく正本に近い副本といえるだろう。かなり痛んでいたが修復されて保管されている。

(5) 阿部正道氏蔵・小図

秋岡論文で「江戸幕府の末期の老中阿部正弘の後裔正道氏は小図の蝦夷地の部一舗を蔵される。これは幕末、日本、ロシア間の北辺領土問題発生の際必要として、正弘が描かしめたものである」と述べる北海道の部の小図で、現在も阿部氏が所蔵する。

同氏の話では、福山藩主の阿部家が北海道経営にかかわりをもったので制作されたという。任を解かれて、明治になってから同家に戻されたとのことである。当然、針穴はないが、丁寧に写され、完成度が高く、保存状態もよい写本である。

(6) 戦前に海軍兵学校へ内田六郎氏から寄贈された小図

大谷著書が「小図は浜松の内田令太郎所蔵（本図は足立信頭の後裔のもとに伝えられたものを近年購入した）の図がある。（小図は）維新の前後にあたりて航路上大いに実用に供せられ、諸藩具眼の士競ってこれを謄写したれば、この時代に成れる写本は現今猶多く遺存せり」と述べる。

秋岡論文で「小図の内田氏蔵のものは当主たる子息六郎氏によって第二次世界戦争以前の際に、江田島の海軍兵学校に寄贈された。戦後 30 年代に南波氏に依頼して兵学校を受け継ぐ海上自衛隊幹部候補生学

校、術科学校を調べて貰ったが見つからなかった」と解説する小図である。

筆者も、呉在住の学友で海上保安大学校元教授の谷村聖二郎氏に依頼して、江田島関連を徹底的に搜索してもらったが、発見できなかった。谷村氏が現職当時、学生だった落合海将補（当時）が江田島の海上自衛隊第一術科学校長だった御縁で、旧海兵の教育参考館をはじめ呉の海兵関連施設を丁寧に調査してもらったが発見できなかった。

さらに終戦時に接収を恐れて、当時の海軍関係者が資料を宮島の巖島神社および大三島神社に疎開させていて、その疎開先まで縁故をたどって調査願ったが、やはり見つかっていない。

江田島は終戦直後に大水害に遭い、多数の資料が滅失したというから、滅失資料のなかに入っていたのではないかと思われる。

巖島神社に預けられ、のちに海上自衛隊呉地方総監部を通じて返却された資料のなかには、横山大観の絵や東郷元帥の書などが含まれていたという。英国海軍では百数十年の時空を超えて貴重品として保存されているが、当時の海軍あるいは海上自衛隊では貴重品としては扱われていなかったようで、じつに残念である。

（7）その他の最終本伊能図

中 図——徳島藩主・蜂須賀家に伝存し、戦後に整理されたといわれる伊能図は、徳島大学教育学部で購入され、現在は徳島大学図書館に収蔵されている。全 10 枚であるが最終本ではなく、測量途中段階の中図 7 枚と九州第一次測量の大図 3 枚である。

当時の国宝調査員・是沢氏が実見したと記している岡山藩主・池田家から放出された伊能中図の行方は、現在も不明である。徳島藩の図も当時、最終本として紹介されているから、内容については、最終本かどうかは不明である。

現物はおそらく好事家に落札され、囊底深く所蔵されているのではないかと思われる。戦後の売り出しであるから焼失は考えられない。どこからか偶然に、突然現れることを祈っている。

その他——以上のほかに、秋岡論文にいう南波氏が大屋書店で購入し、現在は神戸市立博物館に収蔵されている久留米付近の大図がある。筆者は本図を実見していないので何ともいえないが、赤木康司氏によると、針穴はあるが仕上げはよくないとのことである。おそらくは九州第二次測量の大図稿本であろう。

同じような針穴のある大図として、伊能家縁戚の藤岡健夫氏が所蔵していた、熊本県人吉から西米良付近の大図稿本がある。着色され、描画は丁寧であるが、同じ地名を墨の小文字と朱の大文字で記している。また、接合記号のコンパスローズが見あたらない。

祖母が伊能家から輿入れの際に持参したとのことである。本図も最終本ではなく九州第二次測量の稿本と考えられる。平成 13 年（2001）5 月、伊能忠敬記念館に寄贈された。

途中段階で制作された伊能諸図

1. 寛政 12 年蝦夷地東南岸、奥州街道図

大谷著書によると、「寛政 12 年大図」は縮尺 43,636 分の 1 で、「奥州街道」11 枚、「蝦夷地」10 枚が制作されたが、この「蝦夷地」の 10 枚だけは東京帝室博物館（現・東京国立博物館）にあり、そのほかは所在不明という。また、大図の縮尺 2 倍の「自箱館至富川」が伊能家にあるともいう。

東京国立博物館の所蔵する「寛政 12 年大図」は、第 1,2,3 図と第 7,8,9,10 図の 7 枚で、第 4 から第 6 の 3 図を欠いており、行方はわからない。

ほかに奥州街道の第 11 図に相当する図が現存する（「忠敬と日本図」展の図録）。また、伊能家にあった伊能忠敬資料は現在、すべて香取市の伊能忠敬記念館（以下、記念館という）に寄贈されているが、縮尺 2 倍の大図は見あたらない。

「寛政 12 年小図」の縮尺は大図の 10 分の 1 に当たる 436,360 分の 1 で、東博と伊能忠敬記念館にあるというが、これらはいずれも現存している。

また、第一次測量の図では針突法は使われなかったことが最近わかっている。伊能図の特徴として、既述のように地図制作にあたって測量下図から針穴を使って測線を写したことが挙げられるが、第一次測量の提出図では針穴は使われていない。筆者も数年前から確認しているが、これは最近わかった新事実である（前掲図録）。

国立歴史民俗博物館蔵の「寛政 12 年小図」は秋岡武次郎氏旧蔵で、大正 10 年（1921）代に大阪市の古書即売展で購入されたものである。「享和元年五月、今井政太郎写之」とあり、提出図の 5 か月ほどのちの写本である。

ほかに秋岡論文は、大田原と須賀川の大図二枚を寛政 12 年大図としていたが、鈴木純子氏らの調査で国立国会図書館の最終本大図模写本の一部とわかっている。

なお、「寛政 12 年大図」について秋岡博士は、蘆田伊人から受けた昭和 7 年（1932）2 月の書簡のなかで「江戸から蝦夷地までの奥州街道の測量図の折本二帖を見て、帝大図書館三階に自分が整理してしまっておいたが、震災で焼けてしまったのは残念。この二帖は大谷氏も知らないこと……」と伝えられていると記す（『日本地図作成史』）。

筆者が関係したものでは、平成 11 年（1999）1 月 12 日、大阪府中央区の市立開平小学校で、国土地理院の長岡地図部長（当時）と行った調査により、同校所有の伊能図は「寛政 12 年小図」と確認した。

同校の前身は北船場の豪商升屋山片家が創立した第三大学区 13 番小学校である。升屋が収集した貴重な書籍などを所蔵している。このなかにごく初期の伊能図が収められていたことは、升屋と伊能の関係を思い起こさせられる。

また、昭和 50 年（1975）頃と思われるが、国立公文書館内閣文庫で、「松前距蝦夷行程測量分図」という 10 軸の卷子本を実見した。「紅葉山文庫」本と伝えられる。図名が違うし、図郭が一致しないかもしれないが、「寛政 12 年大図」とほぼ同地域であり、描画方式も似ている。

当時は針穴にこだわっていたので幕末の写本かと考えたが、寛政 12 年の図には針穴がないとすると、本図はより素性の正しい大図ということになる。内容は東京国立博物館の大図よりもよい。

2. 享和二年本州東岸図

(1) 大 図

大谷著書は「縮尺 36,000 分の 1 で描き、32 枚から成る」といい、世田谷伊能家史料のなかにあった高橋至時による凡例草稿断片では、10 枚と記している。しかしながら、それと思われる図の現物をまだ 1 枚も確認していないので判断できない。

(2) 中 図

寛政 12 年と享和元年の測量地域を合わせて、縮尺 216,000 分の 1 で描いた図である。大谷著書は「その副本伊能家に現存するも 2 葉の内 1 葉はその半部欠損せり」と述べる図である。伊能忠敬記念館に現存する「享和 2 年本州東岸図」中図は、蝦夷地、陸奥北部、陸奥南部、江戸近傍の四枚構成のようであるが、江戸近傍は欠落して三枚のみ現存する。

一方、秋岡論文では、「大日本天文測量分間絵図」と題する図の紹介があり、「伊豆より東蝦夷に至るまでの地図で、大きさ約四疊半のもの二舗、東京某氏旧蔵が昭和 27 年 4 月、東京古典会の古書入札売立会に新田雄松堂扱いで出陳され、早稲田大学図書館に購入された」と述べている。

筆者が実見調査したところでは、この図は二枚構成の享和 2 年中図である。この図から、記念館の中図は 4 枚構成のうち 1 枚が欠図であると判断され、大谷説ともほぼ合致することがわかった。早稲田大学中図は折本であるが、伊能忠敬記念館の中図は軸装されている。

早稲田大学の中図は針穴が鮮明である。緯線が記入されているが、経線は江戸を通る一本だけである。描画は丁寧な反面、諸々に訂正箇所がある。接合記号、凡例、蔵書印などはない。第一図裏に「天文分間真図従伊豆国至奥州仙台、但以曲尺六分為一里、天一度者地二八里二分也」と書いた但書が貼り付けてあ

る。

縮尺と緯度一里の距離を明示する記録である。本図は針穴があるため、伊能グループの制作であることは明らかである。大谷著書は根拠不明ながら「中図は堀田摂津守に提出した」といっている。本当なら、本図は堀田摂津守への提出図の可能性が高い。

(3) 小 図

大谷著書は図の内容を説明しながら、調査時点で現存しないという。何を根拠に言及しているのかはまったく不明である。

3. 日本東半部沿海地図、その他

(1) 総 説

第1次の蝦夷地測量、第2次測量の本州東岸、第3次の羽越測量、第4次の東海・北陸沿海測量が終了したあとで取りまとめた、日本東半部の図である。

大図、中図、小図がある。「日本東半部沿海地図」または「日本東三十三カ国沿海地図」といわれ、場合によっては単に「沿海地図」ともいう。将軍の上覧に供されたので評判になったらしく、とくに小図は多数の写しが作られた。

この東半部の沿海地図小図は、伊能図のなかではもっとも現存数が多い。以下、所蔵者を列挙し、最近の発見その他、補足説明を要する図についてのみ言及する（*印以外の諸図はすべて実見調査済みである）。

(2) 大 図

伊能忠敬記念館蔵・副本 69 枚

大谷著書は伊能家に 69 枚現存するという。しかし、小図には「日本東半部沿海地図」という名称があるが、大図には 69 枚を総称する標題はない。

平成 8 年（1996）、日本国際地図学会誌で伊能図特集が企画された際、伊能忠敬記念館の青木学芸員と話し合っ、おそらくこういうことであろうとしたのは、「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図」31 枚、「奥州街道越後街道図」13 枚、「自江戸至奥州沿海図」17 枚、「自白川至出羽国図」5 枚、「自高崎三国街道図」2 枚、「佐渡沿海全図」1 枚を含む合計 69 枚である。これにより日本東半分の海岸線はすべて連結することができる。

(3) 中 図

1) 伊能忠敬記念館蔵・副本 三枚組二セット

2) 徳島大学図書館蔵・副本 三枚セット

3) 国立史料館副本 三枚セット

秋岡論文に津軽家旧蔵とある。小図とセットで保管されている。筆者が実見調査した際は損傷が激しくばらばらになっており、冊子のような感じだったが、広げて並べてみて地図にまとまった。完成度の高い副本である。現在は研究者でも見学は難しい。家臣が閲覧した際の借用書が同梱されていた。

4) 学習院大学図書館蔵・写本 五枚セット

保柳氏の『伊能忠敬の科学的業績』において、特殊中図と名付けられた図である。地図に領主名が付記されているところが特殊といえ特殊であるが、地図は沿海地図中図と第5次測量地域の畿内、中国沿海図(2枚)、第6次の四国図(1枚)を集めたものである。

沿海中図の奥州部分を南北に2分し、中部と近畿も分けているので、全体では8枚となる。本図をあえて特殊中図と呼ぶことはないとする。陸軍文庫に保管されていたもので、終戦後に焼却されようとしたところを、女子学習院の堀教授が譲り受け、学習院大学に入った。おそらくどこかの大家で幕末に作られたものであろう。

5) 宮城県図書館蔵・写本三枚(五枚セットのうち二枚欠本)

学習院大学中図と同様な描画の図で、仙台藩に伝えられた。蝦夷地と奥州北部が欠本である。

6) イタリア地理学協会蔵・写本5枚 カナ書き

学習院大学中図とまったく同じ図郭の構成で、地名と国名をカナで表記した中図。平成9年(1997)に実見調査したが、幕末の日本に駐在したイタリア総領事のロベッキー氏が作らせたものである

(4) 小 図

沿海地図小図の所蔵者は下記のとおりで、多彩である。

1) 小倉陽一氏蔵・副本*

元伊能家にあった控図である。何らかの理由で小倉家に渡った。

2) 国立国会図書館蔵・副本(堀田摂津守旧蔵)

陸軍文庫、堀田文庫の蔵書印がある。終戦時に関係者が譲り受けたもの。虫食いが多いが、内容はすばらしい。堀田摂津守は伊能測量の総括責任者。

- 3) 国立国会図書館蔵・写本（中川飛守旧蔵）
戦後に購入された。中川飛守は伊能測量当時、勘定奉行や大目付などを務めていた。
- 4) 国立史料館蔵・副本（弘前藩主津軽家旧蔵）
中図とセットで保存されている。
- 5) 神戸市立博物館蔵・写本（佐野常民旧蔵）
丁寧な写本。佐野常民氏は元佐賀藩士で、日本赤十字社社長。明治期における伊能忠敬顕彰の主唱者。
- 6) 国立公文書館内閣文庫蔵・写本（「日本海路測量之図」）
あまり良質ではない写し。実用の目的で作られたものであろう。紅葉山文庫本と伝えられる。
- 7) 早稲田大学図書館蔵・写本（久須美家旧蔵）
早稲田大学元教授の勝俣氏のコレクション。久須美氏は佐渡奉行などを勤めた勘定所系の役人のようである。
- 8) 太鼓谷稲成神社（津和野）蔵・写本（津和野藩主亀井家旧蔵）
縮尺を2分の1とした沿海地図小図。「日本地理測量之図」と一緒に保存されている。天文方へ出向していた津和野藩士・堀田仁助が自写し、藩侯への帰国土産としたもの。亀井家から奉納された。
- 9) 古河歴史博物館蔵・写本（鷹見泉石の写し）
古河藩家老だった鷹見泉石が隠居後に自写したもの。
- 10) 名古屋市立蓬左文庫蔵・写本
尾張家の重臣で海防担当も勤めた大道寺氏の用人・水野正信による写しである。水野は筆まめで、数百冊の写本を作ったが、そのなかの一点。粗い写しであるが、実用的には十分だったろう。
- 11) 長崎市立博物館蔵・写本
渋川景佑（景保の弟、善助の後身）の門人だった大村藩測量方・峰源助が虫干しの際に、渋川家蔵の沿海小図を見て、景佑に願って自写したもの。景佑は「外に出すなよ」といって許したと記録がある。
- 12) 宮内庁書陵部蔵・写本
平成17年（2005）に河崎倫代氏の案内で実見した。「日本地理測量之図」とセットで保管されているので、2分の1縮小図かと思われたが、普通の縮尺だった。丁寧な写し。特記すべきことはない。
- 13) 前田尊経閣文庫蔵・写本
幕末に天文方へ出向していた加賀藩士・藤井三郎が制作した写し。河崎倫代氏と同道して確認した。
- 14) 愛知県稲武町古橋懐古館蔵・稿本・部分（針穴あり）

全図の3分の1以下の断片であるが、丁寧な仕上げ。先祖が本陣をしており、買い求めたものではないかという。交通路であり、この地を伊能隊は測進した。前例がないことなので記憶に残り、旅人が運んだ品を求めたのであろうか。

15) 石川県那谷寺蔵・写本

那谷寺出入りの造園業者からの奉納品。先祖が大聖寺藩の検地奉行をしており、藩侯からの頂戴品であるという。よくできた写本である。河崎倫代氏の案内で実見調査した。

(4) その他

そのほかの第6次、第7次測量関連の諸図のなかで特筆されるべきものは、第一次九州測量の際に作られた大図21枚、中図1枚、小図1枚が、東京国立博物館の佐々木第二研究室長（当時）により発見されたことである。

この図の所在は大谷著書に記載されていたが、鹿児島大学増村教授（故人）が探索したが見つからず、筆者も挑戦したが発見できなかった。目録の名称が「九州沿海図」だったので検索できなかったのである。都立中央図書館の伊能小図とよく似た展開だった。

内容としては、浅草文庫の蔵書印があり、堀田撰津守旧蔵品の可能性が高い優秀な伊能図である。図郭が最終本と合わないが、彩色、文字、地図合印のいずれも完璧であり、現存する伊能図のなかでもっとも質が高いと考えられる。『伊能大図総覧』には大図21枚を参考収載した。

今後への期待

最近の10年間に、数多く報道された伊能図再発見の歴史について概略を述べたが、まだまだ伊能図は国内外に数多く埋もれていると確信している。

幕末に日本との交渉が深かった地図先進国のロシアでは、クルーゼンシュテルンの測量によって日本図が作成されており、彼はまた、シーボルトの報告から伊能図の存在を知っていたはずであるが、ロシアからはまだ一枚も伊能図は見つかっていない。

アメリカについていえば、イタリアですら当時の総領事が、たまたま写本を作って自国へもち帰っているのに対して、幕末日本との接触がもっとも早かったにもかかわらず、明治以降の実用的な模写大図しか渡っていないということは信じがたい。アメリカとロシアには、華麗な大名道具の伊能図が、かならずあるだろうと思っている。

一方、国内では、旧岡山藩主池田家から流出した伊能図の行方がわかっていない。また、伊能グループは忠敬没後も諸大名の頼まれ仕事に忙殺されて、最終版の上呈が遅れたという口碑が残っている。唐津藩、島原藩、水戸藩などには、地図が渡された形跡がある。

たとえば島原の榊原史料館には、藩が支払った地図代金の領収書が残っている。筆者は、藩政関係の地図を多数収蔵する藩主の菩提寺を調査させてもらったが、一枚も発見できなかった。

江戸東京博物館の「伊能忠敬展」準備中には、伊能図の「沿海地図小図」の売り込みが同博物館にあった。筆者はその地図を実見したが、高価格かつ良質な図ではなかったので収蔵を薦めなかった。結局、出所は聞けなかった。

市中に滞留している伊能図の存在は、現在でも十分ありうる。東京大学にあったはずの伊能中図の欠本「関東の部」は、どこへ行ったのであろうか。まだまだ埋もれている伊能図は多いと考えられる。